# WIDF 国際女性調査団に参加した 3 人の中国人女性
## ― 劉清揚・白朗・李鏗

藤目ゆき

## (はじめに)

国際民主女性連盟(Women's International Democratic Federation。以下、WIDF と略称)は朝鮮の WIDF 加盟団体である朝鮮民主女性同盟の呼びかけに応え、1951 年 5 月、朝鮮戦争の実態調査のための国際女性調査団を朝鮮北部へと派遣した。調査団を構成したのは、カナダ、英国、デンマーク、フランス、イタリア、チェコスロバキア、オランダ、ソ連、中国、オーストリア、東ドイツ、西ドイツ、ベルギー、ヴェトナム、キューバ、アルゼンチン、チュニジア、アルジェリアの 18 か国の女性 20 人である。世界各地から集まった女性たちは先ず中国の瀋陽で全員集合し、丹東から鴨緑江を渡って朝鮮に入った [1]。

18 か国もの女性たちが調査団を構成し、危険の去らない戦場である鴨緑江から北部朝鮮の諸地域を限られた時間内に視察し、報告書をまとめあげてゆくのは並大抵のことではない。そのような大事業を実行するためには、調査団に加わった一人一人の努力はもとより、各国言語の通訳体制・安全な旅程の計画・宿舎や食事の世話・移動手段の確保・訪問地の人々との折衝といった、多岐に渡る準備と念入りな手配が必要だった。

それらの面で中国の女性たちの果たした役割は大きかった。WIDF 加入団体である中華全国民主婦女連合会 (All-China Women's Democratic Federation。以下、ACWF と略称) [2] が調査団の受け入れ体制を整え、必要とされる実務を担っている。また、劉清揚 (リウ・チンヤン、Liu Chin-yang) 、白朗 (バイ・ラン、Bai Lang) 、李鏗 (リ・ケン、Li Keng) という 3 人の中国人女性が調査団に参加した。中国は朝鮮戦争勃発以後、志願軍を朝鮮戦争に送り出し、国をあげて「抗米援朝」のキャンペーンを展開しており、ACWF はその重要な一翼を担っていた。WIDF 調査団への関与もまた、ACWF が取り組んだ抗米援朝キャンペーンの一部と位置づけることができる。

が、このような朝鮮戦争下の WIDF 調査団の取り組みは、これまで中国女性史の研究対象になっていない。

---

[1] WIDF が朝鮮に派遣した国際女性調査団の報告書は、日本語版については藤目ゆき編集復刻『国連軍の犯罪』(不二出版、2000 年、203～267 頁) 、英語版については"We Accuse; Report of the Committee of the Women's International Democratic Federation in Korea, May 16-27, 1951" (in Korea International War Crime Tribunal, ed., *REPORT on U.S.Crimes in Korea 1945-2001*", June, 2001, New York)を参照。この調査団に関する研究論文として、藤目ゆき「女性国際調査団のみた朝鮮戦争」(『女性・戦争・人権』第 3 号、2000 年 5 月、126～148 頁) および『アジア現代女性史』第 7 号に特集された、松田祐子「朝鮮戦争国際女性調査団のフランス人団員」、藤目ゆき「モニカ・フェルトンと WIDF の朝鮮戦争真相調査団」などがある。

[2] 「中華全国民主婦女連合会」は、その名称を 1957 年に「中華人民共和国婦女連合会」に、1978 年に現在の「中華全国婦女連合会」に改めている。英語の略称は一貫して ACWF である。

そこで、本稿は、先ず WIDF 調査団に参加した劉清揚、白朗、李鏗という 3 人の中国女性に注目し、彼女たちが WIDF 調査団に参加した経緯や調査団の中で果たした役割、帰国後の活動などを追跡した。3 人の人物像を通して、冷戦がピークに達した朝鮮戦争の最中に WIDF が行った国際連帯活動に中国の女性たちがどのように関与したのかについて、その一端を明らかにしたいと思う。

## 第 1 章　劉清揚

### 第 1 節　劉清揚と中華全国婦女連合会

劉清揚（1894 年 2 月 15 日－1977 年 7 月 19 日）は、国際女性調査団においてデンマークのイーダ・バックマンとともに副団長をつとめた。当時 57 才の劉清揚は 3 人の中国人団員の中の最年長者であり、中国女性たちの中で責任者としての役割を果たしていた。先ず、WIDF 調査団の取り組みが始まるまでの劉清揚の半生 (3) を概観しておこう。

劉清揚は、辛亥革命から五四運動とその後の民族解放運動、抗日解放戦争、国共内戦から新民主主義革命へという 20 世紀前半の革命的激動を生き抜いてきた。12、3 歳の時にはもう、軍艦建設のために金の指輪を寄付した評判の愛国少女であり、辛亥革命に際しては反清革命の軍事蜂起に備えて宣伝や財政活動に従事した。五四運動が起こったとき直隷第一女子師範学校の学生であり、学友の鄧穎超 (4) らと天津女界愛国同志会を結成し、その会長に選ばれている。まもなく鄧穎超や周恩来ら 20 人の同志とともに学生運動指導組織「覚悟社」を創立。周恩来らが逮捕されると、劉清揚は奔走して釈放を訴え、全国各界人士の広い支援を得て、周恩来ら学生全員の釈放を勝ち取った。彼女は組織者として卓越しており、情熱的な力あふれる演説で人々を鼓舞したという。

劉清揚は中国共産党成立時の 56 名党員の一人であり、中国共産党の正式発足に先立って、1921 年にパリで周恩来・張甲府らとともに在欧中国人最初の共産主義グループを組織した。劉清揚と張甲府は在欧中に結婚する。ドイツ・ソ連を経て 23 年に帰国した劉清揚は、鄧穎超らが指導する天津の進歩的女性団体「女星社」に参加し、『婦女日報』を創刊して、その総経理になった。第一次国共合作時代には何香凝 (5) が指導する国民党中央婦女部や宋慶齢 (6) が主宰する国民党中央婦女高級幹部訓練班などの要職に就いた。

---

(3) 劉清揚については、特に別註が無い限り孟昭庚「周恩來的入黨介紹人之一劉清揚」(『中国共産党新聞』　http://cpc.people.com.cn/BIG5/68742/70427/70428/7334799.html) による。

(4) 鄧穎超（1904 年 2 月 4 日～1992 年 7 月 11 日）は直隷第一女子師範学校卒業後、1924 年に中国社会主義青年団に加盟、25 年 3 月に中国共産党へ入党。同年 8 月に周恩来と結婚。49 年、第 1 回女性代表者大会で ACWF 副主席に選出。83～88 年に全国政治協商会議主席。

(5) 何香凝（1879 年～1972 年）は日本留学中に孫文と知り合い、夫の廖仲愷とともに中国同盟会・国民党で活動。国民党中央婦女部の部長をつとめた。党内では共産党との協力を支持する左派として知られる。第 1 回女性代表者大会で AWCF の名誉主席となる。息子の廖承志・娘の廖夢醒はそれぞれ中国共産党員。

(6) 宋慶齢（1893 年～1981 年）は孫文の夫人。孫文死後、中国国民党中央執行委員。中華人民共和国成立後は中央人民政府副主席。1953 年の第二回全国女性代表大会で ACWF 名誉主席に選出。

ベルリンにて。写真左は1921年撮影。左から張甲府、劉清揚、周恩来、張光家 (7)

1923年于柏林

第一次国共合作破綻後の一時期、妊娠したことや張甲府の共産党からの離脱などもあって政治活動を休止し、離党している。が、31年の柳条湖事件（九一八事変）以降、日本による侵略への憤りから再び政治の舞台に復帰して抗日闘争に身を投じ、中国共産党と連携して救国組織の結成や革命工作に従事した。37年の盧溝橋事件（七七事変）後は幼児を老母に託して抗日戦争に参加し、天津から南京へ、そして南京から撤収する最後の列車に乗って武漢へと向かう。抗日救国のために団結して奮闘することを呼びかける劉清揚の演説には気迫がみなぎり、演説を聴いた若者たちの熱情を沸き立たせたという。

抗日戦争の初期、彼女は武漢で周恩来に党籍回復の希望を提出した。が、周恩来は「しばらくは党外にいるのが統一戦線工作のために好都合だ」と助言したという。彼女は武漢で李徳全 (8) らとともに戦時児童保育会を組織している。さらに国民党・共産党の女性代表や各界の女性運動リーダーたちによる廬山婦女談話会 (9) に出席し、女性統一戦線の構築に尽力した。この談話会から女性運動指導委員会が組織され、劉清揚はその訓練組の責任者となり、2年間で1000名近い「抗日婦女幹部」を育成することになる。そこから多くの女性が革命への道を進んだ。

抗日活動のために劉清揚は家族から遠く離れて東奔西走し、50歳の誕生日は重慶で迎えた。誕生祝いに周恩来が料理の腕をふるい、郭沫若が詩を詠んだという。

劉清揚は抗戦下、国民党一党独裁に反対する民主主義的統一戦線組織である中国民主同

(7) 劉方清「我的母親劉清揚」『回族研究』No.58、2005年第2期、163頁

(8) 李徳全 （1896～1972年）馮玉祥の夫人。抗日戦中は重慶で婦女慰労総会を指導。49年中華人民共和国成立後、国務院衛生部長(衛生相)に就任、中国紅十字会会長を兼任。第一回女性代表者大会でACWF副主席に選出。54年・57年の2回来日している。

(9) 宋美齢の呼びかけで1938年5月に廬山で開かれた女性会議。国民党の沈慧蓮・唐國楨、共産党の鄧穎超・孟慶樹、救国会の史良、沈茲九、YWCAの張藹貞、有名な女性運動家である劉清揚、李徳全、吳貽芳、雷潔瓊、勞君展、俞慶棠ら48人が出席。会議は「動員婦女参加抗戦建国工作大綱」を制定し、抗戦期の全国女性統一戦線を建設した。「邓颖超与庐山妇女谈话会」（中国共産党新聞 http://cpc.people.com.cn/GB/85037/8377905.html）参照。

盟に加入しており、抗日戦争勝利後の 45 年 10 月にはその中央執行委員・中央婦女委員会の主任に選出された。また、革命工作のために北京と天津を常に往来して学生運動のリーダーと秘密裏に連携し、「反飢餓・反内戦・反蔣・反米」の運動へと進歩的な青年知識人を組織し、解放区へと送り出した。彼女の活動は常に国民党に監視されていた。国共内戦の最終段階にあった 1948 年秋、劉清揚暗殺計画が発覚する。劉清揚はそこで河北省平山県にあった共産党中央統一戦線工作部の所在地である李庄へ、さらに年末には共産党中央と人民解放軍の総本部がある西柏坡へと移動。離婚したのはこの頃であった。張甲府は国民党に対する譲歩を公然と呼びかけるようになり、「反徒」として中国民主同盟からも追放されていた[10]。劉清揚は離婚を表明し、共産党とともに進むことを選んだのである。

49 年 1 月、とうとう北平が解放される。劉清揚は北平へ戻り、49 年 2 月 2 日に行われた正陽門城楼で人民解放軍入城盛典にも参加した。劉清揚の党籍回復は 1961 年のことであるが、心から共産党を信頼し、党外者である立場を積極的に生かして統一戦線運動に献身し、新民主主義国家の建設に邁進したのである。このような劉清揚が ACWF の創設に関与し、指導的な役割を果たしていくのは当然のことだった。

第 1 回女性代表者大会　1949 年 3 月 24 日
於　北京中南海懐仁堂[11]

49 年 3 月 24 日から 4 月 3 日にかけて第 1 回全国女性代表者大会が開催され、革命勝利のための「中国各層各界民主婦女連合の統一戦線組織」として ACWF が創立された[12]。共産党支配地区の女性団体のよびかけを受け、国民党支配地区からも革命を支持する民主団体やキリスト教団体の女性たちが自主的に参加し、女性解放をめざす全国的な女性団体の連合を実現したのである。

---

[10]「張甲府」(『東華流韻』、北京東城区図書館ホームページ、http://www.bjdclib.com/subdb/laneculture../famousperson/201004/t20100409_32122.html)

[11]「中華全国婦女連合会（全国婦連）」『新華資料』http://news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/15/content_2220569_2.htm

[12] ACWF の創設については中華全国婦女連合会編『中国女性運動史 1919-49』(中国女性史研究会編訳・論創社、1995 年）の他、末次礼子『二〇世紀中国女性史』青木書店、2009 年、128 頁、「1949 年 3 月 24 日 第一次全國婦女代表大會召開」『中国共産党新聞』(http://cpc.people.com.cn/BIG5/64162/64165/77585/78769/5462318.html）などを参照。
「1949 年 4 月 3 日 中華全國民主婦女聯合會成立」『中国共産党新聞』(http://cpc.people.com.cn/BIG5/64162/64165/78561/79696/5521367.html)、「中華全国婦女連合会」(http://big5.xinhuanet.com/gate/big5/news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/15/content_2220569_1.html)などを参照。特に人事については、新華ネットの「中華全国婦女連合会」(http://news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/15/content_2220569_1.htm）と百度百科の「中華全国婦女連合会」(http://baike.baidu.com/view/74787.htm?subLemmaId=74787&fromenter）を参照。

ACWFの名誉主席に何香凝、主席長に蔡暢[13]、副主席に鄧穎超・李德全・許広平[14]、秘書長に区夢覚[15]、章蘊[16]が選ばれ、劉清揚は執行委員候補となった[17]。

同年9月に中華人民共和国建国に備えて開かれた中国人民政治協商会議全国委員会第一次全体会議には、出席した全代表が662人、そのうち女性が69人である。劉清揚は、蔡暢や鄧穎超とともにACWFの選出する15人の正式代表の一人として出席した[18]。

政治協商会議で発言する劉清揚[19]

## 第2節　抗美援朝運動と劉清揚

1950年6月に内戦として始まった朝鮮戦争は、米国の介入によって国際戦争に転嫁し、同年10月には国連軍が平壌を占領、中国との国境に迫った。中華人民共和国は国家保衛と朝鮮支援のために人民志願軍の派遣を決め、10月25日に朝鮮北部で中国人民志願軍による米韓軍に対する最初の攻撃が行われる。中国人民志願軍は朝鮮人民軍とともに12月に平壌を奪回し、38度線を越えて南進するが、1951年春頃には米韓軍に押し戻され、戦局は38度線の付近で膠着することになる。

その間、国内では50年10月26日に郭沫若を会長として中国人民保衛世界和平反対美国

---

(13) 蔡暢（1900年5月14日－1990年9月11日）はフランス留学中の1923年に入党、李富春と結婚。25年モスクワ留学を経て帰国。34年からの長征では、鄧穎超や康克清らとともに紅第一方面軍に参加。41年党中央婦女委書記。45年に党中央委員。56年、党中央婦女工作委員会第一書記。文革では批判を受ける。75年1月全人代常務副委員長に就任。

(14) 許広平（1898～1968年）は魯迅の夫人。ACWF副主席として女性代表団を率いて諸外国を歴訪。1956年に原水禁世界大会に参加するため来日。

(15) 区夢覚（1906～1992年）は1939年、中共広東省委婦女部長に就任。40年に延安へ赴き、中共中央婦女委員会委員になる。

(16) 章蘊（1905～1995年）は1925年に中国共産党入党。抗日戦争期に中共東南分局婦委の責任者。建国後、中共中央華東局婦委書記、中共上海市委婦委書記、華東地区と上海市の婦連主任。1953年にACWF党組副書記になり、ACWF副主席になる。

(17) AWCFのホームページにある「中華全国民主婦女連合会第一届执行委員会委員名单」によれば、ACWF弟1期執行委員会において選出された執行委員は51名、執行委員候補は21名である。http://news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/15/content_2220569_1.htm

(18) 中華全国婦女連合会編『中国女性運動史 1919-49』（中国女性史研究会編訳・論創社、1995年）、501頁

(19) 前掲「我的母親劉清揚」172頁

侵略委員会（抗美援朝総会）が結成される[20]。国をあげて抗美援朝キャンペーンが始まり、ACWF もその重要な一翼を担い、劉清揚もさまざまな取り組みに活躍した。たとえば 51 年 1 月 28 日に北京の故宮太和殿で開かれた抗美援朝・日本再軍備に反対する女性大会では、劉清揚が大会主席として開会の言葉を述べ、デモ行進を先導した。主催者予想をはるかに超える 45,000 人が参加し、主婦や労働者、農民、学生、医療従事者や修道女や尼僧といった各界各層の女性たち、しかも祖母から母、娘、孫の世代までが結集して、「侵略反対、世界の平和を守ろう！」「アメリカ帝国主義と日本再軍備反対！」「子女に教育を！」と声をあげた。政治集会に生まれて初めて参加した人も多かった。あるおばあさんは涙ぐんで、「女たちにも国政を動かすことができる」と感激を語った[21]。

劉清揚は、抗美援朝総会が 3 月末から 5 月中旬にかけて北部朝鮮に派遣した大規模な慰問団にも参加して、指導的な役割を果たしている。この慰問団は 3 月 9 日、「中国人民赴朝慰問団中央総団」の名称で 3 月 9 日に成立大会を開き、ACWF から劉清揚・雷潔瓊ら 26 人が参加した[22]。廖承誌が団長となり、総勢 575 人が中国人民志願軍・朝鮮人民軍・朝鮮人民を慰問した。団は中国全域の様々な民族・団体・革命烈士家族と軍人家族の代表、著名な労働模範・志願軍の戦闘英雄・各界知名人・文芸工作者らによって構成され、575 人は直属分団と七つの分団に編成された。このとき、劉清揚は ACWF を代表して直属分団の団長をつとめた。なお、後述のとおり第七分団に白朗が参加している[23]。

中国訪朝慰問団の女性代表・劉清揚と朝鮮民主女性同盟の女性たち[24]

朝鮮民主女性同盟が全世界の女性に送った平和メッセージを受けて WIDF は朝鮮に国際

---

(20) 「中国人民保衛世界和平反対美国侵略委会成立」『大公報 百年回眸』
http://202.55.1.83/history/history_news.asp?news_id=165947

(21) 「【新華社北京廿八日電】北京市各界婦女四万余人於二十八日挙行盛大的抗美援朝、反対美帝重新武装日本的愛国大会及示威遊行」（http://202.55.1.83/history/history_news_content.asp?news_id=142929）

(22) 石希責任編集「1951」（中国婦女網）
http://www.women.org.cn/quanguofulian/dashiji/1951.htm

(23) 「中國人民赴朝慰問團名單」http://lygyj.blog.hexun.com.tw/59769621_d.html

(24) http://www.jiaxiangwang.com/prc/h-prc-1951-korea-weiwentuan.htm

調査団を派遣することを決め、中国からは劉清揚・白朗・李鏗が中国女性代表として参加することになった。世界中からきた女性たちが5月13日に瀋陽で全員集合し、16日には鴨緑江を渡って朝鮮に入る。

朝鮮ではWIDF調査団一行を迎えて、5月19日夜、平壌の各界代表600余名が集まり、熱烈な歓迎大会を開いている。朝鮮民主女性同盟の朴正愛が朝鮮女性を代表して、歓迎と感謝の言葉を述べた。彼女は米軍の残虐行為を悲憤慷慨して訴え、朝鮮の息子たちと娘たちが中国志願軍とともに前戦で闘い、朝鮮の女性たちは大半が工場や鉱山、農村で働いて前戦を支えていると述べ、「全世界の女性から力強い支援と励ましを受ける朝鮮人女性は決して屈服しません」と強調した。これに応えてWIDF調査団団長ノラ・ロッドが、「最大限の努力をして、皆さんの闘いの状況や欧米兵士が種々の暴行を働いている状況を本国の人々に伝えます。全力で平和を勝ち取りましょう。もし私が若かったら朝鮮に留まって朝鮮の再建を助けたいほどです」と熱情溢れるスピーチをする[25]。

続いて調査団副団長であり中国人女性代表である劉清揚が、こう挨拶した。「朝鮮人民が世界平和を守る最前線で英雄的な正義の戦いを進めていることに私たち全中国の人民と女性たちは非常に感動しています。中国・朝鮮の人民の利益は一致しているのだから共同してアメリカ帝国主義の侵略者を排除するために努力しましょう。私たちはこの調査任務を忠実に完成させ、報告書を作成して全世界に向けて公にします」[26]。

調査団一行は21日まで平壌とその近郊に滞在し、22日以後は黄海道・平安南道・江原道・慈江道の4地域に分散して調査に赴いた。劉清揚は、ベルギー、イタリア、チェコの代表とともに平安南道の陽徳を通って江原道文川郡の万先村（平壌から150キロ）と元山港（万先村から48キロ）などを訪問している[27]。彼女たちが朝鮮で見た、空襲で廃墟と化した村々、焼かれた山林や畑、空襲を避けるため夜にしか農作業ができなくなった農民たち、国連軍による虐殺や蛮行の生々しい痕跡、そして彼女たちが会った人々からの証言などが詳細に記録された。そして、劉清揚が平壌での歓迎会で約束した通り、調査団は報告書をまとめあげ、世界に国連軍の犯罪を告発することになるのである。

## 第2章　白朗

### 第1節　抗日戦争・解放戦争から抗美援朝戦争へ

白朗（1912～1994）は著名な作家である。瀋陽で医師の家に生まれ、父の死後は著名な漢方医であった祖父のもとに母と共に身を寄せた。やがて祖父は白朗らを連れてチチハルに移り、黒龍江省督軍呉俊昇の軍医所所長を務めたが、張作霖と呉俊昇が殺された後は職を失い、生活は困窮した。白朗の姉弟は貧しさのために十分な病気治療を受けられず早逝し、白朗の母親は不幸続きの中で精神を病んだという。白朗は、黒龍江省立女子師範学校

---

(25) 「国際婦連代表団抵平壌調査美軍破壊残殺暴行」大公報、http://202.55.1.84/history/history_news.asp?news_id=143043
(26) 同前
(27) 前掲『編集復刻版　国連軍の犯罪』240～251頁

卒業後の 1929 年、従兄で、当時既に中国共産党員であった羅烽と結婚する[28]。

1931 年の柳条湖事件勃発後、白朗は抗日地下活動に参加した。共産党の指示を受けてハルビンの国際協報社に入り、記者・編集者として活躍する。抗日活動に対する弾圧が強まる中で 35 年末に羅烽と共に上海に逃れ、以後、抗日作品を次々に発表した。37 年の盧溝橋事件後、日本の全面的な中国侵略に対して、中国の多くの作家が抗日戦争に身を投じた。8 月 13 日に日本軍が上海に進撃すると、白朗は上海文芸界戦地服務団に参加して抗日活動に奔走した。戦時下の過酷な生活の中で乳児を失ったが、抗日解放の大義を確信し、39 年には老母と子どもを家に残し、羅烽とともに中華全国文芸界抗敵協会が組織した作家戦地訪問団（王礼錫団長）に加わった。45 年、延安で入党している。

延安文芸座談会に参加した白朗（右）と「労働模範」の張桂蘭（左）1948 年[29]

抗日戦争勝利後の46年、白朗はハルビン暫定評議会議員、東北文芸家協会副部長、東北作家協会輪執主席などを歴任。また農村に深く入り解放区の文芸工作に活躍し、土地改革に参加して農民たちとふれあった。短編集『牛四的故事』（香港新中国書店、1949年）には解放前の暗い時代を生きた民衆の 苦難や土地への熱望が描写されている。

49年10月に中華人民共和国が成立する前後、白朗は中華全国文学芸術界工作者代表大会に出席し、東北文連と東北文芸工作者協会の創立にも参画した。小説『幸福な明日のために』[30]は50年に書きあげられた。後に14版を重ね、20余万冊を出した代表作であり、朝鮮語・日本語にも翻訳されている。主人公は子供の頃から貧しく苦しい生活をし、虐待を受けて育ったが、善良な性格で、共産党の指導する新中国の建設に明るい希望を見いだす。工場に入り、労働者階級の一員として成長し、身を犠牲にすることもいとわず、まっすぐに共産党と新中国の未来を信じて前進してゆく。この作品は、建国初期の新しい社会と文化、人と人の間の新しい関係、中ソの友誼、組織と人民の主人公に対する思いやりと愛情を活写し、女性労働者の純粋な心の美しさを描いた感動的な名著と

---

[28] 白朗の生涯については、閻純德「二十世紀中国著名女作家…白朗」（http://www.tianyabook.com/renwu2005/js/y/yanchunde/essj/020.htm）および白石淑子「白朗試論」（『お茶の水女子大学中国文学会報』6, 1987 年 4 月、156-168 頁）、同「白朗の初期作品について―出て行く若者たち―」（立命館文學 615, 2010 年 3 月、793-779 頁）、同「作家戦地訪問団について」（『鴨台史学』（11), 2011 年 3 月、77-98 頁）参照。

[29] 写真の出典は、「為人民大眾：大連文藝發展新時代的旗幟」（大連新聞網 http://www.dlxww.com/culture/content/2012-05/23/content_327845.htm）

[30] 原題は『為了幸福的明天』。人民文学出版社から 1951 年.7 月に刊行。この作品は鮑秀蘭（伊藤克の中国名）が日本語訳し、『幸福な明日のために』という題で 1952 年 8 月に三一書房、続いて 1953 年 1 月に民主新聞社 から刊行されている。伊藤克は日中戦争勃発前に中国人の男性と結婚して中国へ分かり、抗日解放後は、遼寧省にある鞍山製鉄所の図書館で資料係の仕事について中国語を日本語に翻訳する仕事に従事していた。伊藤の自伝に『悲しみの海を越えて』（講談社、1982 年）がある。

して高い評価を受けた。主人公は「労働模範」であった趙桂蘭(写真左) を連想させる。病気にかかりながら工場の仕事を休まず、危険薬品の爆発から工場を守るために咄嗟に自分の身を犠牲にし、その爆発で障害者になってしまう。そんな自己犠牲的行動や同志愛に守られて前進してゆく主人公の歩みは、趙桂蘭の歩みと重なってみえる。

作家として抗日戦争から国共内線下の解放戦争を闘い続けてきた白朗は、朝鮮戦争が勃発すると抗美援朝の文芸運動に挺する。抗美援朝総会は1951年春に大規模な慰問団を朝鮮に派遣すると、白朗は第七分団に属して参加した。この分団は、抗美援朝総会東北分会や中国新民主主義青年団東北委員会、解放軍東北軍区部隊、北文連、東北農民協会、そして白朗の所属する東北作家協会がそれぞれ代表を派遣していた[31]。5月にWIDF調査団一行が瀋陽に集合したとき、白朗は抗美援朝総会の朝鮮慰問団から帰国したばかりであった。

1951年、第一次中国人民赴朝慰問団の構成員たち。白朗は、前列左から二人目[32]

1951年5月4日。黄谷柳が、WIDF調査団に参加するために帰国する白朗を送っていった。[33]

[31] 註(23)に同じ。
[32] 黄茵編／黄谷柳・黄茵撮影『1951-1953, 中国的文人与中国的军人－巴金与他的战友们在朝鲜前线』岭南美术出版社、2007年
[33] (33)同前

## 第 2 節 WIDF 調査団参加前後の白朗

5 月 13 日、調査団初日の会議はのっけから一波乱があった。結論が調査前から決まっているような調査団にしたくないというデンマークのケート・フレロンや英国のモニカ・フェルトンに対して、ソ連のマリア・オビシヤンニコワが疑問を投げ、白朗は強く非難したのである。フェルトンはこう回想している。「白朗は三人の中国代表の一人で、中国訪朝団で最近訪朝したばかりだった。彼女は自分が朝鮮で見てきたことを語り、私の方を向いて、既に人間が耐えられる限界に達している朝鮮人民の苦悩をさらに重くしようとしている、と非難した。そして白朗が米国資本家の邪悪さを弁じたてるので、私は生まれて初めて自分がロックフェラーかバーバラ・ハットンであるかのような気にさせられた」[34]。

このように、最初は対立の火花が散る一幕があった。抗美援朝の明快な立場に立つ白朗らにとって、西側の女性たちの議論は無責任な中立主義に映ったかもしれない。またフェルトンたちにとっては、最初から結論が用意されているものを調査団と呼ぶことはできず、また邪悪な資本家階級と戦っているという道徳的優越性を振りかざされては心外でもあった。が、それでもやがて女性たちは歩み寄り、真相究明こそが共通の目的だという一致点を確認しあうことができた[35]。調査団が旅程の打ち合わせに入ったとき、中国女性を代表して旅程を説明したのは白朗であった。フェルトンは、「色白でふっくらした、陽気な目をした作家」の白朗だが、旅の説明が進むにつれて目の色が厳粛になっていった、と述べている。白朗は調査団員たちにこう言った。「皆さんに警告しなければなりません。皆さんは、朝鮮に入る前に戦争のような状況になっているのに気づくでしょう。瀋陽から丹東へ行く途中の半分をすぎれば、米空軍がたえまなく爆撃をしている地域に入るのです。私たち自身の安全のために、中国内でも朝鮮でも、移動は夜にしないといけません。それに、どこにスパイがいるかわからないので、丹東に出発するまでホテルを離れない方がいいでしょう。ちょっとした運動がしたい方は、ホテルの裏にプライベート・ガーデンがありますよ」と[36]。白朗は、WIDF 調査団が行こうとしている場所が危険な戦場であることを女性たちに思い出させるものであった。

WIDF 調査団は朝鮮で 4 グループに分散し、白朗は東ドイツ、西ドイツ、オランダの代表たちと 4 人で平壌から价川、熙川、江界、満浦を訪ねている。白朗はまた、オビシヤンニコワとフェルトン、ジレッタ・ジーグラー(仏)、エヴァ・プリースター(墺)とともに報告書作成委員 5 人の一人となった。彼女たちの共同作業によって最初の報告書は中国語・英語・フランス語・朝鮮語・ロシア語の五か国語で同時に作成されたのである[37]。

劉清揚が五四運動の時代から女性解放運動家として名を馳せた「老大姐」であり、ACWF 幹部として WIDF 調査団の中国側責任者を引き受けるに到ったのと対照的に、白朗は WIDF 調査団がきっかけになって ACWF・WIDF の女性運動に参加するようになった。

1951 年 6 月、国際女性調査団のノラ・ロッド団長は、ブルガリアのソフィアで開催された WIDF 執行委員会に正式に調査団報告書を提出した。ACWF は、副主席李徳全を団長に、

---

(34) Monica Felton, "That's Why I Went", Lawreence & wishart, 1953, pp.68-69.
(35) Ibid., pp.69-71.
(36) Ibid., p. 71.
(37) Ibid, p.71 なお白朗たちのグループが調査に赴いた价川、それから熙川、江界、満浦地域の報告は、前掲『国連軍の犯罪』252～262 頁。

白朗をふくめて代表団一行5人をソフィアの執行委員会に派遣した[38]。

白朗がその次にフェルトンに会うのは翌52年9月である。この年の春、白朗は作家、音楽家、美術家など、総勢18人の訪問団（団長は巴金）の一員として訪朝した。本号に掲載した西田千津訳の白朗のルポルタージュ「平壌七日」では、52年4月の平壌にもふれ、人々の暮らしや街の様子を伝えている。「春の平壌は、戦時中も活気みなぎる首都だった。私は敬意と熱愛の情を抱いてやって来た。あのとき私は平壌市民が、新しく生み出される偉大な気魄に向かっていく、この町の繁栄した気風にぬくもりを感じた」という[39]。白朗が作家仲間と平壌にいた頃、フェルトンはスターリン平和賞授賞式のためモスクワにいた。彼女はまもなく中国に国家的賓客として招待され、白朗は9月、周恩来の指示を受け、彼女の訪朝に随行した。白朗は「平壌七日」に、フェルトンと共に訪ねた平壌や孤児収容施設や捕虜収容所の姿を生き生きと写し出している。

白朗とフェルトンの出会いの始まりは国際女性調査団初日の対立だったが、以後は国連軍による朝鮮戦争犯罪を訴え、国連軍撤収と朝鮮停戦を訴えるWIDFの平和運動を通して信頼し合う親しい友人となった。フェルトンは10月に北京でアジア太平洋地域平和会議に出席した後、12月にウィーンの世界平和会議[40]に参加する。白朗も中国代表団の一員としてウィーンの会議に出席し、西ドイツのリリー・ベヒターやベルギーのヘルマイネ・ハンファートたちとも一年半ぶりの再会を喜び合った[41]。フェルトンは翌53年、ロンドンで開くNAW（全英女性会議）主催の3月の国際女性デーの集いに中国女性代表を招待したが、これは英国政府によるビザ発給拒否に遭い、実現しなかった[42]。

1953年6月にはコペンハーゲンでWIDFの世界女性大会が開催され、中国からは李德全を団長、章蘊を副団長として、白朗ら代表団一行30人が参加した[43]。この大会には51年の調査団員のうち8人が出席しており、ケート・フレロンの家で再会を祝う楽しいひとときを過ごした。51年の調査の際には「客観的」な観点を堅持したいとオブザーバーの立場を貫徹したフレロンだったが、白朗たちを親愛な友人として歓迎し、「今日は、世界中で一番好きな友人たちが我が家に集まりました。闘いに結ばれた私たちの友情を忘れません」と祝杯をあげた。目に涙を浮かべ、「中国のことは忘れられません。中国の方たちの支援がなかったら私たちはなすべき仕事を果たすことはできなかった。親愛な白朗、偉大

---

(38) 前掲「1951」（中国婦女網）及び *The Corpus Christi Caller-Times,* 25 Jun 1951, p. 14. http://www.newspapers.com/newspage/24015270/)

(39) 白朗「平壌七日」の原文は『白朗文集』3・4に収録されており、全文をインターネットで読むことができる。日本語訳は、本誌114～133頁参照。

(40) 白朗が書いたウィーン会議に関する報告文に「対戦争的荘厳宣判」（戦争に対する厳粛な判決）がある（『白朗文集』3・4、147～155頁）。

(41) ベルギー代表ヘルマイネ・ハンファートは、WIDF調査団の中で最年長の65歳であった。白朗は、朝鮮滞在中のハンファートについて、「ほっそりして背が高く、ピンと背筋を伸ばし、厳しい目をした老婦人」で、朝鮮滞在中は近寄りがたい雰囲気があったという。が、ウィーン会議で再開したときには打ち解けて、そのまなざしも優しいく感じられたと回想している。「我懐念着遠方的朋友」（『白朗文集』3・4、199～214頁）204頁参照。

(42)「我懐念着遠方的朋友」（同前）の中に、モニカ・フェルトンが英国政府の措置に憤慨しつつ、友情をこめて白朗に送った手紙が紹介されている（208～209頁）。

(43)「1953年」『中国婦女網』 http://www.women.org.cn/quanguofulian/dashiji/1953.htm

な中国のために乾杯させてね！」と中国女性たちへの特別の思いを語ったという[44]。

コペンハーゲン大会は忘れがたいものになった。後に彼女は「心逢着心」（心と心が通う）や「我懐遠方的朋友」（遠方の友を懐かしむ）と題してその報告を書き、そこでも 51 年の調査団の仲間たちを懐かしみ、またフェルトンやベヒター、ロドリゲス、ジーグラーらが朝鮮から帰国後迫害に抗して不屈に真実を訴え続けたことをも共感と尊敬をこめて紹介している。これらの報告文は『白朗文集 3・4』に収録されている[45]。フェルトンの『だから私は朝鮮へ行った』と共通して、WIDF の公式報告書には出てこない個人的印象や人物描写、様々なエピソードがちりばめられた、女性史の貴重な史料である。

白朗は、コペンハーゲン女性大会の後、ヘルシンキで女性の集いに出席[46]し、7 月に帰国するとすぐに開城訪問団（団長は羅峰）の一員として訪朝、板門店で挙行された朝鮮停戦調印式に参加した。8 月には全国第二次文代会、全国文連委員・中国作家協会理事に選出される。54 年には第一期全国人民代表大会代表、ACWF 委員になり、56 年にはインドで開かれたアジア作家会議に出席する。白朗はこのように 50 年代の国際的な文化交流や平和運動に大きく貢献した。50 年から 55 年は白朗の人生において最も活動的で、最も多作の 5 か年だったという。この時期の作品には、前述の『幸福な明日のために』や数々の報告文に加え、抗美援朝のために中国と朝鮮を列車で往来した献身的な医療従事者たちの活動を描いた『在軌道上前進』がある。

## 第 3 章　李鏗

### 第 1 節　学者一家に育った李鏗

李鏗（1914 年 11 月～1968 年 9 月 13 日）[47]は、福州の名望家である李家の次女として生まれた。祖父の李世暢は清朝時代、閩浙總督署に勤める官吏であった。父・李景堃は清朝末の科挙試験に合格して官吏になり、中華民国時代には外交部で働いた一方、画や学問に優れ、詩集『愉園詩集』を出した著名な詩人でもあった。05 年に一家が北京に移住したため、李鏗は北京で生まれ育った。ちなみに李景堃の末弟は李喬蘋（1895～1981）で、化学教育家・化学史家として名高い。英国のジョセフ・ニーダムとの親交が知られているが、李鏗の甥にあたる王夏宇によれば、李喬蘋とニーダムを引き合わせたのは李鏗だったという[48]。

---

(44) 前掲「我怀念着远方的朋友」204～205 頁

(45) リリー・ベヒターについては前掲『白朗文集』150、206、208、211～212 頁。ジーグラーについては同前 212～213 頁、カンデラリア・ロドリゲスについては同前 150、202 頁参照。

(46) 「黒土地上的女作家――白朗」（政協遼寧省委員会ホームページ　http://lnzx.gov.cn/Newspapers/wstd/2010-3-19/Article_10504.shtml）には、ヘルシンキで「女性文化日」の慶祝活動に参加したとあるが、詳細は不明。

(47) 北京大学党史校史研究室編集発行『戦闘的歴程　1925－1949・2　燕京大学地下党概況』北京大学出版社、1993 年、207 頁。

(48) 本節は、特に別注がない限り、李鏗の甥（妹の息子）にあたる王夏宇が発表した「懐念姨

李鏗の父・李景堃は儒教的教養の人であり、すこぶる保守的で、女子教育に反対していた。しかし、母の陶碧は違った。陶碧は幼い頃に兄弟たちを説得して読み書きを教えさせたというくらい向学心が高く、当時の慣習通り親の指示に従って結婚したものの、姑を味方につけて福州女子師範学校に進んだ。3年後に優秀な成績で卒業して母校の助教になり、出産までの数年間、教師として働き続けた[49]。李景堃と陶碧には4男4女が生まれた。女子教育に否定的な李景堃に対して、陶碧と李景堃の母は男子も女子も全員教育を受けるべきだと言い張り、李鏗たちを進学させた。陶碧の信念が実を結んだというべきか、一家の学術界での活躍はまばゆいばかりだ。一つ上の兄、耀滋(1914年生)、七つ下の弟、詩穎(1922年生)は共に工学を学び、マサチューセッツ大学で博士号を取得し、その教授となった。一つ下の妹の懿穎(1916年生)は耀滋の学友で、銭学森の従兄弟にあたる銭学榘と結婚する。1952年に米国で誕生した銭学榘と懿穎の息子(李鏗の甥)は、2008年にノーベル賞を受賞することになる銭永健(ロジャー.Y.チエン)である[50]。

李鏗は、1935年に北平大学女子文理学院英文系を卒業した後、山東省で教師になった。38年に7月に延安へ赴き、抗日軍政大学で学び、同年8月に中国共産党に参加。以降、四川省の潼南や温江などへ派遣され、YWCAの農村活動に従事した[51]。

女性たちに読み書きや子育ての知識を教えようとすると、当初は反発に遭うのも珍しくなかった。農村の男たちは「女に物を教えても何の得にもならない」と思っていたし、女たちには他所者のほうが赤ん坊の世話の仕方を知っていると思うと面白くなかったからだ。それでもすぐに雰囲気は変わり、人々は興味を持って学び始める。文字や子育て知識の教育は、政治意識を喚起する壁新聞作りや政治集会などを通した政治宣伝と組み合わされていて、数か月もすると農民の意識はすっかり解放されている。こうして一つの村で組織の基礎を固めると、また別の農村に向かう[52]。李鏗はそのようにして抗日根拠地の建設に尽くしたのである。

(左) 陶碧 (右) 李景堃

母李鏗」(淮陰区政府網 http://www.zghy.gov.cn/news/news.asp?id=75971)による。なお、赵慧芝「著名化学史家李乔苹及其成就」(『中国科技史料』第122巻(1991)第1期、13頁・23頁)には李喬蘋が1946年に初めてニーダムと出会ったと書かれているが、李鏗のことは特に何も書かれていない。なお、ニーダムは1952年に朝鮮戦争下の米軍による細菌戦に関する調査を行った国際科学者委員会の一員として重要な役割を果たした。

(49) 李鏗はモニカ・フェルトンに陶碧のことや、嫁の進学や孫娘の教育を支援した李景堃の母のことを詳しく語っている。Monica Felton, "That's Why I went", Lawrence & Wishart, 1953, P.73. また陶碧の学歴は王夏宇「我的三舅李诗颖」(清華校友網 http://www.tsinghua.org.cn/alumni/infoSingleArticle.do?articleId=10086041)を参照。

(50) 前掲「懐念姨母李鏗」の他に、「李氏兄弟关于钱学榘的记述」鳳凰網 http://bbs.ifeng.com/viewthread.php?tid=5899101)及び 李懿穎に関する Geni's Genealogy Database の情報 http://www.geni.com/people/Yi-Ying-Eva-Tsien-%E6%9D%8E%E6%87%BF%E9%A2%96/6000000008279609249)を参照。

(51) 註(47)に同じ。

(52) Monica Felton, op.cit., pp.73-73.

YWCA のリリー・K・ハアスがエリザベス・B・コットン宛に 39 年 12 月 16 日付けで出した手紙には、YWCA 農村部の李鏗が中国の中部と西部で農村活動に従事してきたことを紹介した後、こう書かれている。

「李鏗さんを知る人々は、彼女の活動方法の稀にみる民主性や、つながりのできた人たちを最高に成長させることのできる彼女の能力を非常に高く評価しています。彼女にはとても良い哲学があると全員が認めていますが、正式な教会メンバーではありません。彼女はラディカルな運動において祖国に献身する人々の自己犠牲に深く感動しており、惜しみなく自身と自身の持つ全てを与えるという傾向があります」 (53)

ハアスらは李鏗の力量と豊富な活動経験を高く評価し、次代の YWCA 農村活動の幹部になることを嘱望し、米国留学の可能性を探すためアジア基督教主義高等教育支援財団のマクミランに相談した。40 年 5 月には李鏗のもとにオレゴン州の州立大学から奨学金が得られるとの知らせが届いている (54)。40 年 10 月、李鏗は党の同意を得てオレゴン州立大学家政学部に入学し、修士号を取得して 41 年 12 月帰国。以後、42 年から 46 年にかけて山東省福山、北平、昆明などで YWCA 工作を行い、1946 年 7 月から 48 年 7 月まで燕京大学家政学部で講師をつとめた。48 年の夏には清華大学内に暑気託児所と家庭婦女会を設立している (55)。

その間に李鏗は、政治活動の中で出会った 2 歳年下の董寿莘と結婚している。董寿莘はすでに党員であった李鏗の影響を受けて共産党に加入したという (56)。彼は 41 年秋に雲南省昆明の西南連大学航空系 (57) を卒業したエンジニアである。大学卒業後すぐ、貴州の大定航空発動機製造廠の建設準備活動に入った。当時中華民国政府は航空機開発に国運をかけ、39 年に製造廠準備処を設けて米国留学中だった李耀滋と錢学渠ら 7 人の航空工学研究者を呼び戻し、製造廠各部門の責任を負わせていた (58)。つまり、董寿莘は李鏗の兄と妹婿らが指導する航空機開発の職場に就職したわけである。彼は 44 年夏に米国ペンシルバニ

---

(53) Extract from letter of Lily. K. Haass to Mrs. Cotton, December 16, 1939, in *the Archives of the United Board for Christian Higher Education in Asia*, RG 11, Box 23, Folder 572, Yale Divinity School Library.

(54) Letter form Mrs. Elizabeth Boyes Ccotton to Mrs. T. D. Macmillan, May 10, 1940., ibid. なお、李鏗の米国留学は家庭環境からも自然な選択であった。すでに兄の李耀滋は 37 年から米国に留学しており、彼の親友である錢学榘は耀滋と鏗の妹である懿穎の長距離恋愛も始まっている。42 年になると弟の詩穎もまた留学する。

(55) 註(47)に同じ。

(56) 呉大観『我的愛国心』（http://0707nwpu.blog.163.com/blog/static/79588908200910205 4031313/)。呉大観は中国の「航空エンジンの父」と呼ばれる航空工学のエキスパートである。『我が的愛国心』は呉大観の口述をまとめたもので、北京大学工学院工学部講師であった時期（1947～1948 年）の回想の中で、董寿莘が呉大観の北京大学への就職を仲介したこと、李鏗の影響で董寿莘が入党したことなどに言及がある。なお、『我的愛国心』は 2009 年に航空工業出版社から刊行されている。

(57) 西南連大学は、日本軍の空爆・侵攻を背景に北京大学・清華大学・南開大学が連合して雲南省昆明に設立した、戦時連合大学である。

(58) 楊鮮之「大定發動機製造廠滄桑」中華科技史学会學刊第 16 期（2011 年 12 月）105 頁、劉宗平「大定廠探密--訪王文煥先生談烏鴉洞的奇蹟」同前、110～111 頁。

ア州の発動機工場へ派遣され、47年の帰国までそこで発動機製造技術を学んだ[59]。李鏗と董寿莘の間には、44年頃に長男、47年頃に長女が生まれている[60]。

李鏗は1943年に保育者養成訓練を受け、それから託児所運動に積極的に取り組んでいった。「預けたりしたら子どもを盗まれるのでは」と疑う人たちもいて、最初の規模はごく小さかった。が、託児所の子どもたちが健康にすくすく育っている様子を見て、多くの母親たちが集まるようになった。李鏗は長男も長女もそれぞれ生後1か月になると保育所に預け、自分自身は保育者養成所の運営に献身したという[61]。

李鏗の託児所運動は、抗日戦争期から国共内戦期に女性運動の中で重視された託児所建設・保育者養成事業の一部であった。劉清揚の戦時児童保育会に関しては第1章に述べたが、解放区の女性たちは戦争で親を失った孤児たちや女性戦士の乳幼児を育てる託児所建設活動に早くから取り組み、46年には蔡暢・康克清らが児童保育委員会を発足させている[62]。また、宋慶齢は38年に保衛中国同盟（42年に「中国福利基金会」と改称）を設立して全世界に抗日勢力の擁護を呼びかけて医薬品などの救援物資を募集し、これらを抗日根拠地へ送って解放区の児童保育事業を支援している。この組織は中華人民共和国樹立後の50年に中国福利会と改称するが、李鏗はその委員の一人でもあった[63]。こうした流れの中でACWFは全国婦女幹部学校（婦幹校）[64]を設立すると保育事業の幹部育成を推進し、50年には1850人の女性が訓練を受けた。同年の保育施設は解放前の147所から643所へと発展し、5倍以上に増加している[65]。李鏗は抗日戦争勝利の直後はYWCAの一員として農村部の他に学生工作部の仕事にも取り組んでいたが、やがて活動の場をACWFに移し[66]、婦幹校保育科の科長をつとめるようになる。婦幹校保育科の主要任務は託児所、幼児園、保育院のための保育者を養成することであり、対象は託幼施設の保育者とACWFに加入する省・地・県レベルの女性組織の中で児童福利活動に従事する幹部であった。当

---

(59) 楊宝茹責任編集『清華革命先駆 上冊 中共清華大學地下組織活動及組織史要』清華大学出版社、2004年、449頁

(60) 1951年5月に李鏗はモニカ・フェルトンたちに対して男の子が7歳、女の子が5歳だと話している。Felton, op.cit., P.67.

(61) Felton, ibid., P 67, P74.

(62) 前掲『中国女性運動史 1919-49』443頁、「蔡暢児童教育思想述評」（中国社会科学院網 http://edu.cssn.cn/jyx/jyx_xqjy/201310/t20131023_451935.shtml）

(63) 前掲「「懐念姨母李鏗」による。ただし、李鏗が中国福利会でどのような活動を担ったかについて詳細は不明。1950年7月25日に上海で開催された「中国福利会執行委員会の第一期第一次会議」に出席した執行委員名簿には、章蘊の名がみえる。

(64) 1949年に宋慶齢、何香凝、蔡暢らが設立したACWF幹部学校。95年に「中華女子学院」と改称、96年に大学となり、今日にいたる。

(65) 前掲「蔡暢児童教育思想述評」

(66) 袁永晟の孫にあたる人が抗日戦争終結前後のYMCAについて書いている文章（http://blog.sina.com.cn/s/blog_70aa8f2b0100oxpb.html）によれば、抗日戦争期、YWCAとYMCAは西南連大学が置かれた雲南省昆明に学生公社を置いて学生援護活動に取り組んでいたが、昆明学生公社の幹事がYMCAの李儲文とYWCAの李鏗であった。抗日戦争勝利後の46年5月に西南連大学が解散し、学生たちが北京に戻ってくると、YMCA・YMCAは新たに北平基督教学生公社を設立した。李鏗は北平基督教学生公社（北京大学付近の景山後街太平街13号）の準備を開始したが、まもなく学生公社を去り、後にACWFに移った。李鏗が去った後、北平基督教学生公社の執行幹事には、YWCAの張秀が就任した。

時保育科の教員は 7 人、輔導員は 3 人で、科長の李鏗は米国で修士号を取っていたが、他の教員や輔導員は皆、大学卒業者であったという[67]。

## 第 2 節　李鏗の WIDF 調査団への参加とその後

モニカ・フェルトンの『だから私は朝鮮へ行った』の中で、李鏗は、その人物像が目に浮かぶように描かれている魅力あふれる女性たちの一人であり、彼女が登場する頁はユーモラスな楽しい筆致で書かれている。李鏗は、フェルトンたちが瀋陽に到着してから最初に親しく話をした中国人であった。彼女は 5 月 12 日の夜、到着したばかりのフェルトンやフレロン、イーダ・バックマンたちが宿泊したホテルの部屋を訪ねてきて、「私もいっしょに朝鮮へ行きます」と、米国流のアクセントで挨拶した。ほっそりしていて目が大きく、肌は日焼けし、艶やかな髪はショートカット。人生は教えられていたよりもはるかに愉快だと思っているような雰囲気の彼女を、フェルトンは一目で好きになった。

家族写真の中の李鏗

李鏗が「劉清揚は責任者で、白朗は作家」だと話すと、バックマンが「貴方は？」と聞いた。李鏗は自分が保育者訓練学校の運営をしていること、中国再建のための仕事は多く、大勢の既婚女性が家庭の外で働くことを望んでいるので託児所を運営するスタッフの養成が必要だと説明した。李鏗が 5 歳と 7 歳の子どもをもつ母親で、彼女自身は 37 歳になると聞いて西欧の女性たちは驚いて目を瞠り、しばらく言葉も出なかった。西欧女性の目にはたぶん 20 歳前後の若者のように映っていたのだろう。「瀋陽を発つまでに私たちは中国人女性の年を推し量るのはもう諦めてしまった。一番近い年を推量したときでも 5 歳ははずれていた」と、後にフェルトンは回想している。子どもたちを生後 1 か月で保育園に預けたという経験に興味をもって、フレロンが「そんなに小さいうちに預けるのは心配じゃなかったの？」と聞くと、李鏗は「いいえ、そんなことないわ」と否定し、「もちろん自分で赤ちゃんの世話をしたいです。でも、今の中国にはなすべきことがたくさんある。だから今はこれから生まれてくる世代のために辛抱しないと。それに、小さい子たちは保育園でしっかり面倒をみてもらっているの」。また、「子どもたちが大きくなって、親に反発しないかしら？」との質問に、「そうは思わないわ。どうしてそれが必要だったか、きっと理解するでしょう」と話している[68]。李鏗は西欧の女性たちに、中国の女性たちがどんなふうに新しい国を建設しようとしているかを知らせたがった。西欧の女性たちもまた、李鏗を通して中国への興味がかきたてられた。渡米経験もあり英会話も流暢にできる李鏗は、このようにして中国の女性たちと英語圏の女性たちの交流と相互理解に李鏗ならではの貢献をしていった。

---

[67] 姚明『姚明 我的生平』電子図書 http://www.1921.org.cn/tushu.php?ac=inlist4&bid=360。姚明は、1951 年 11 月に李鏗が農村工作へ出かけている留守中に、婦幹校保育科の副科長に就任した。李鏗が北京に戻った後も保育科に留まり、共に働いた。

[68] Felton, op.cit., pp.67-68.

調査団一行が瀋陽から丹東へ向かう列車の中でも、李鏗とフェルトンは互いの人生や活動について色々と語り合った。その内容をもフェルトンは『だから私は朝鮮へ行った』に詳しく書いている[69]。李鏗が話した祖母や母、父や兄弟のこと、彼女の活動経験や結婚や子どもに関する物語は、一人の中国人女性が語る生きた中国現代史であった。フェルトンは李鏗の語りから、儒教や封建制、外国からの侵略の下で生きてきた中国女性たちがどのように闘って新時代を拓き、新しい社会を築こうとしているかを感じ取り、明るい未来を信じて祖国建設に邁進する姿に強く印象づけられたのだろう。

フェルトンの本の中に快活で溌剌とした姿が活写されている李鏗であるだけに、彼女がWIDF 調査団の訪朝をどう感じ、どう考えたのか、興味深く思う。が、残念ながらそのような情報は未だ見つからない。51 年後半からに 57 年までの彼女の活動として分かっているのは、中国福利会の委員や婦幹校保育科長、中南海機関幼児園主任などをつとめ、寝食を忘れて社会活動に従事していたこと、51 年秋に土地改良に赴くために一時的に北京を離れたこと[70]だけである。第三子・第四子が生まれたのはこの時期と思われる[71]。

他方、50 年代以降は李鏗よりも夫・董寿莘のほうがはるかに公に注目されており、資料も多い。董寿莘は 47 年に清華大学に職を得て、地下党活動に従事し、抗美援朝キャンペーンの中では清華大学で真っ先に志願軍参加を表明した一人になった[72]。51 年秋には「中央土地改革団第三団」の秘書長、党支部書記に任命され、四川省内江の土地改良に赴いた[73]。李鏗はここに随行したと考えて良いだろう。董寿莘は 52 年に朝鮮戦争停戦交渉代表団に加わり、翻訳などにも従事し、朝鮮人民共和国三級軍功章と中国人民志志願軍抗美援朝記念章を授与されている[74]。53 年に第一次五年計画が始まり、軍事的に重視される航空開発の基礎として、八大学航空学部の協力で北京航空学院（北航）が設立される。董寿莘は北航の建設と教学に参加し、北航の発動機系主任、ロケット系主任などを歴任する[75]。こうして見れば、抗日戦争勝利後の 10 年間は、董寿莘にとって党員として大学地下党組織

---

[69] Ibid.

[70] 註(67)に同じ。

[71] 前掲「懐念姨母李鏗」によれば、「三年自然災害」と呼ばれる 1959 年から 61 年の時期、李鏗は 4 人の子どもを育てていた。当時、李鏗自身も経済的に余裕のない中で、甥の子どもを思いやり、栄養価の高い食品を贈るなど心遣いを忘れなかったという。

[72] 1947 年に米国から帰国した董寿莘は、ひとまず元の航空廠に復帰し、まもなく北京に移動して清華大学の教員として就職。48 年春、清華大学教員の党員たちは「清華講師教員助教連合会」を組織し、やがて董寿莘がその主席になる。50 年に中国人民志願軍が朝鮮戦争に参戦すると、北京の各大学で志願軍に参加を表明する教員・学生が続々と名乗りをあげ、清華大学では 11 月 5 日までに董寿莘ら 40 人の教員と学生が参軍を決心したと報じられている（「大清華燕京等校學生紛紛報名志願赴朝抗美各民主黨派宜言受到廣大師生擁護」『人民日報』1950 年 11 月 6 日、中国文革研究網 http://www.wengewang.org/simple/index.php?t15614_1.html）。続いて清華大学工会は米国の「ヴォイス・オブ・アメリカ」を中国人民の精神に害毒を流すものと弾劾し、聴取禁止と厳格な取り締まりを求める宣言を発した。董寿莘もその宣言に名を連ねている（「清華大学工会会員掀起反対收聴“美国之音”運動簽名発表宣言，號召自覚不聴“美国之音”，要求政府厳格取締收聴覚。清華工会文教委員会（1950.11.21）、中国文革研究網 http://www.wengewang.org/read.php?tid=11614）。

[73] 註(59)に同じ。

[74]「清華学子系列：核武器研製方面（3）：其他傑出貢献者水木社區手機版」 http://m.newsmth.net/article/Alumni/single/1646

[75] 註(59)に同じ。

の中で地位を高め、さらに著名な航空工学専門家として党が重視する国家的航空開発を主導する重責を果たすことで地位を固めてゆく 10 年間であった。だがその一方、李鏗は解放後の数年間こそソ連や東欧の社会主義諸国に出かけたり、毎年のように天安門で行われる国慶節行事に招待されていたというが、51 年秋以後は、党員であったとはいえ、表舞台で活躍する機会は少なくなっていったようだ。

董寿莘は 60 年代には中国の核開発の先端で働き、技術者として第一次から第三次の核爆発実験を担う [76]。その一方、李鏗は 57 年に「右派」のレッテルを貼られてしまう。下放され、農村で強制労働に従事した後、60 年に「右派」の帽子は取れたものの、以後は北航で英語を教えるだけになった [77]。文革の嵐が吹き荒れていた 68 年夏、李鏗は監禁されていた北航の四階から飛び降りて死亡したと伝えられている [78]。

学者一家に育ち、英語圏の人々とも広い交友があった李鏗は、WIDF 調査団の西欧女性たちとすぐにうちとけ、新中国の建設に邁進する中国人女性の姿を鮮やかに印象づけた。だが、その同じ李鏗が、反右派闘争から文革へと向かう中国では「出身成分」の悪い「臭老九」・「階級敵」と扱われ、無惨な死を遂げるに到ったということである [79]。

---

[76] 同前。董寿莘は 1962 年 10 月中国人民解放軍国防科工委 21 試験基地研究所副所長となり、地下核実験に従事。1984 年基地司令部副参謀長になり、地下核実験に従事。同年 年 2 月国防科工で情报資料研究所顧問。

[77] 前掲『姚明 我的半生』によれば、1957 年反右派闘争が始まった時、姚明は湖北省武漢市で調査活動をしていた。戻ってくると、学校に多くの大字報（壁新聞）が貼ってあり、李鏗もまた非難されていた。些細な発言から李鏗は「右派」に分類されてしまい、姚明はとても悲しんだ。二人は共に活動し、互相尊重、互相支持の良い関係であった。李鏗には思ったことをすぐ口にするところがあって、これが災禍を招いたという。

[78] 文化大革命の時期、北航の造反派は「猖獗をきわめ」（『姚明 我的半生』）、李鏗と前後して多数の教員が監禁されて審査を受け、自殺に追い込まれた。

[79] 李鏗の末弟である李森滋もまた、文革期、「成分不好」であり、海外関係があり、「臭老九」（「知識人」の意味。地主・富農・反革命分子・悪質分子・右派分子・裏切り者・スパイ・資本主義の道を歩む者など八つのカテゴリーよりさらに下位にある者として軽蔑する言葉）であるとして迫害を受けた。李森滋の隣人によれば、夫妻は両方ともつるしあげられ、陰陽頭に髪を剃られて引き回され、屈辱を受け尽くしたという（李竹「我們代印的故事（之一）」http://blog.51.ca/u-63067/?p=158）。李鏗の死後、家族が遺品を整理していたところ、「私は階級敵なのか」と何度も自問を繰り返す李鏗の日記が見つかったという。李鏗の死は、「燕京大学の悲劇」の一部として言及されることもある（倪艮山「燕京大学的悲劇」http://www.edubridge.com/situleideng/nigenshan.htm）。

なお、反右派闘争と文革の奔流は、劉清揚と白朗をものみこんだ。白朗は、1958 年に反右派闘争のなかで丁玲たちの「反党グループ」に属する右派として非難され、阜新炭鉱へと強制労働に送られた。61 年末までに「右翼」の帽子は除かれ、創作活動を再開するが、文革期には激しい迫害を受けて心身を病み、一時は瀕死の状態にたちいたっていたという。文革が始まったときすでに 70 歳代であった劉清揚も、受難を免れなかった。彼女は 7 年半拘留され、罪をきせられたまま 77 年に世を去った。中国共産党は 1978 年 12 月の 11 期三中全会で文革の清算と改革開放の路線を定めた。劉清揚・白朗・李鏗の名誉回復が行われたのは、その後のことである。

## (おわりに)

1952年6月、WIDFは朝鮮に派遣した国際女性調査団からの報告書を受け取り、その内容を全世界に向けて発表した。最初五か国語で作成された報告書は、WIDFの国際ネットワークによってヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ、アジア各地の言語に翻訳され、朝鮮戦争の即時停戦を求める国際世論を喚起することになった。

ケート・フレロンがコペンハーゲン女性大会で再会した調査団員たちの集いにおいて「中国のことは忘れられません。中国の方たちの支援がなかったら私たちはなすべき仕事を果たすことはできなかった」と発言したことについて第2章で言及したが、その感謝の念は他の調査団員たちにも共通していたことだろう。実際、調査団に加わるまでは中国に疑念を抱いていた女性が中国・朝鮮滞在中にすっかり中国観が代わり、集会に出かける折々にACWFから記念に贈られた中国服を着て行って自慢したというようなエピソードもある。1951年のWIDFによる国際女性調査団の成果は、中国の女性たちの貢献なくしては得ることのできないものであった。

3人の中国人女性は調査団に大いに貢献したといえる。劉清揚は、五四運動期に遡る長い女性解放闘争のキャリアとヨーロッパでの生活経験があり、厳しい抗日戦争と国共内戦の時代を統一戦線の旗手として戦い抜いてきた年長者である。ACWFが調査団の中国代表団責任者として劉清揚を信任したのも肯けることであり、劉清揚はしっかりとその信任に応えた。白朗は、劉清揚よりほぼ20年若い、働き盛りの年代の作家であった。抗日戦争期から従軍作家として活躍してきた白朗には国際女性調査団の訪朝に関して「書くこと」が何より求められていただろう。白朗は実際、調査団の執筆委員として報告書の作成に寄与したのみならず、「平壌七日」や「心逢着心」、「我懐遠方的朋友」などのルポルタージュを通して、平壌の姿や国際女性運動のなかで結ばれた友情を書き伝えている。李鏗は、調査団参加にあたってACWF内で彼女がどのように任務づけられていたのかは未だ明らかでない。だが、農村活動や託児所運動に豊かな経験があり、不自由なく英語を話す李鏗が、新中国の建設に邁進する中国女性たちの考えや方向性を外国の代表たちに伝えるのに最良のスポークスパーソンとして貢献したのは間違いないだろう。以上のように、劉清揚・白朗・李鏗はそれぞれにWIDF調査団にとって不可欠な役割を担い、この大規模な国際連帯事業に寄与したのである。